



繪本曾我物語 完



^ 13
2743



へ13
2743
へ13
2743

門へ13
號2762
卷



藤野氏遺愛記

明治四年四月廿四日

藤野氏

伊東家系圖

大職冠鎌足公 内大臣 賜藤原姓

維職 伊豆押領使

維繼 カ、九郎

家繼 從五位下 久三四郎太夫 入道寂レシ門

祐家 伊東太郎太夫 從五位下 母佐藤御

吉代 維景 狩野スガ守 從五位下

光家 カノ國林介養子 林四郎

親光 狩ノ五郎

祐親 カノ次郎後号 イトウ入道

祐泰 河ノ三郎

茂光 狩野スガ

宗茂 狩ノ介

祐清 九郎 於北國討死

祐光 カノ四郎 父討死後母方親方ノ介 宗茂三子ヲシテカノ為

祐繼 伊東武者所 母大見平喜露水草

維光 下ノ次郎

女子 エウフヨシ室

祐經 シドウウロウ 五位下

行光 カノ少尉 民部少輔

女子 スケツ子室後 嫁土肥縣太郎

祐茂 ウサ三郎

女子 田代信

女子 右大将家内妻

祐兼 イツ次郎

叙左門佐任



祐政 守正左門尉

祐員 三郎

祐時 大房九ノサ
從五位夫等任

祐長

光時 カ太郎

為佐 カ次郎

信綱 甲コウシ者

宗時 カノ新介

為仲

女子 九郎スミヨ室

女子 二宮太郎三嫁ス

祐成 曾我十郎

時致 曾我五郎

實永 幼名御坊丸
後日三郎

祐成時致等ガ養方ノ兄アリ京ノ

小次郎信俊ト号別胤タラ以テ系二

載テ蒲殿ニ仕シガ主ノ大事ニ臨テ遁レ

本レトセラテ討手ノ為ニ討セラル信俊

先ニ祐成ラガ企ニ與セヌ今又主ヲ

顧ズ却テ誅セラル是義ヲ知ラガル

者ト云モ宜ナリ

曾我物語發端

孝經曰孝悌之至通於神明光於四海立所不亘抑孝子為我兄弟之危難也
凌ぎ權貴富豪の父讐と討得ハ誠小神明ト通考老と謂フ一其ノ實後代ハ
稱一人ハ誠感動セト是レ海ノ光ノ今其本末ト檢テ小室小伊豆團久酒英ノ願
控ハ藤原平家継トノ人若アリ妻ハ嫡子伊東太郎祐成トモ名付テ其ノ後妻ト
迎ヘ小室由經ト死セリ嘗テ後妻ノ連子小水草トノ人及女子トモ妻トテ乙石死セシメ
然ル小室妻密小坊子祐家ト毒殺シテ其レハ家傳ハ其後トシテ乙石小室アリ伊東武元祐
繼ト号揚孫小坊子祐之莊トシテ河津ノ次弟祐親ト名付テ其ノ後ハ通レテ其ノ
稱ト叔由祐親ハ父ノ非業ノ死を知リ且モ身ハ心發揚孫トモ立テ其ノ地成死
仍ル小室由經ト死セリ嘗テ後妻ノ連子小水草トノ人及女子トモ妻トテ乙石死セシメ
ト号附小久壽二年七月辛卯先生長安送テ三原義朝討テ其ノ後ハ通レテ其ノ
ガ武元武義ノ敵ト攻テ是ト亡ク伊東祐繼トモ名付テ其ノ後ハ通レテ其ノ
ハ其レヲ聽ク今ハ小及人ハ河津祐親ト名付テ其ノ後ハ通レテ其ノ
ハ河津祐親ハ伊東ガ敵ト殺シ其ノ後ハ通レテ其ノ

曾我實永

年の
 菊
 のりて武者
 下の二篇一歳
 附小二月三日
 月母の牙伊豆
 の二命と系一七
 母の死と去目送物
 送る物種大不也款一七
 送る物を種る小字作更
 伊東の海のと在り我思代
 の事知る物種留る控取
 及七十歳年押取せと



白虎野

令石十五元
 服七二反後
 俵と名のを
 増酒は紙
 取女合を
 京助
 小勤
 仕せ
 去む
 初て
 兼安
 二兼心月
 物種志



白虎野

徳ありし者一味ありて不具成儀き一雨小今無遺志成義忽ち小は事成地成
 懐く才の旧先後者以下一七懐く存まを思ひよ上あて申りいぬ人懐く徳を
 一浪田門の支士を尋ひて西順田儀の義を徳言小懐親大不徳りて理成儀に成
 志く徳懐の少くを念懐くくは言と六波羅入修入修て石文と下して存本懐親を
 上を併状の執返者併けりる懐親亡父懐家入道寂蓮が徳子小如卑世身庶
 子懐徳一旦家懐成徳と人をも其成長の上にお懐くくを遺言は且懐徳大親の
 合戦小の麻と有書言けり死初小除て来ま中してを我は後平座を携ち血を流す幼
 命を少軍一、抱のち之重盛公是とされ懐親の中宗理を懐親が親より只口再
 弟徳のそ父祖が儀状由事せ且身庶派申て存本の宗室小不那にる宇作兵
 一兵と支分家も人一向後遠仇ありと裁けせらる支士は徳も是也申す是より
 懐親已が監を成毎中平家と懐と稱して能居せり才の言と懐り以懐親を
 と懐河小下り伯父を懐小言長命を親むを言の懐親は南河津勢を我一族を懐
 て討たへと支くと懐きける小入河前系東懐親同初懐河系存本入河前系の上

者才也一味ありて不具成儀き一雨小今無遺志成義忽ち小は事成地成
 懐く才の旧先後者以下一七懐く存まを思ひよ上あて申りいぬ人懐く徳を
 一浪田門の支士を尋ひて西順田儀の義を徳言小懐親大不徳りて理成儀に成
 志く徳懐の少くを念懐くくは言と六波羅入修入修て石文と下して存本懐親を
 上を併状の執返者併けりる懐親亡父懐家入道寂蓮が徳子小如卑世身庶
 子懐徳一旦家懐成徳と人をも其成長の上にお懐くくを遺言は且懐徳大親の
 合戦小の麻と有書言けり死初小除て来ま中してを我は後平座を携ち血を流す幼
 命を少軍一、抱のち之重盛公是とされ懐親の中宗理を懐親が親より只口再
 弟徳のそ父祖が儀状由事せ且身庶派申て存本の宗室小不那にる宇作兵
 一兵と支分家も人一向後遠仇ありと裁けせらる支士は徳も是也申す是より
 懐親已が監を成毎中平家と懐と稱して能居せり才の言と懐り以懐親を
 と懐河小下り伯父を懐小言長命を親むを言の懐親は南河津勢を我一族を懐
 て討たへと支くと懐きける小入河前系東懐親同初懐河系存本入河前系の上

若くは保野ねと名合へたのちへ久松久吉より南力丸若子よりむいしと強られぬ
 平のうゝあはことと云ふ今果けりしは徳義の買の罪を足るに肥後を能く
 采ひぬはんとやう久吉打笑ひ徳義とて一掃のちを名合しつゝあはれ
 系久もゆき倒れしう人ごとくそを養ふるは可成り難かる久勝直と名あとのさう
 早く組命がゆきののはをせ系久も動きず物所徳義を同系久が大の男大徳は
 と倒れその勢を皆一掃ゆきゆりつて是と具の收として各海海不給く又之者も
 ひ物こそきひとら矢と旗の中へ徳義と照中射しつゝの以別をさす一掃徳義は
 九二番大徳之帝・高徳者源八に替へて徳義と高徳者源八に替へて徳義と敵の
 片られぬとわかれ八掃が放つ矢徳義が胆小と射つる面をうらむるは徳義
 先成徳助け能く其木の根不胸打られぬと一掃ゆきゆき徳義は徳義と大徳は
 何者のに業そと圖は徳義若くは息成徳義と名あはれたるやうな人
 彼之者も士大徳八掃の女今目のあはれとてなるといふ徳義は徳義と名あ
 曲る捕とと甚成て進をうけ文より方かぞへく徳義と名あはれたるは徳義

久息男二万身頼重之依て徳義九万身徳清と名あはれ一掃系元二年二月徳義が
 妻山内をまじ久吉徳清と名あはれ徳義が妻も今八掃と名あはれ徳義と名あ
 とけり久吉徳清は是と徳義二万身まのあはれ進をうけ徳義と名あはれ一掃
 所不徳義害せし者徳義が妻と大徳八掃の女と名あはれ徳義と名あはれ九
 万身徳義は是と名あはれ今余入ひしと名あはれ徳義と名あはれ一掃系元二年
 大徳とてと名あはれ徳義と名あはれ進をうけ流人頼徳義と名あはれ一掃系元
 名あはれは是と名あはれ平家の國もいふと徳義と名あはれ一掃系元二年
 名あはれと名あはれ徳義と名あはれ今徳義と名あはれ一掃系元二年
 九万身徳義に名あはれ徳義と名あはれ一掃系元二年二月二十五元服と名あはれ
 と名あはれ徳義と名あはれ今徳義と名あはれ一掃系元二年二月二十五元服と
 ひあはれと名あはれ徳義と名あはれ今徳義と名あはれ一掃系元二年二月
 平と名あはれ元元年七月徳義と名あはれ一掃系元二年七月徳義と名あはれ
 名あはれと名あはれ徳義と名あはれ今徳義と名あはれ一掃系元二年七月

後法^ノ若日^ノ
 助命^ノ
 せら^レ倅^テ身^ノ小
 久^ク父^ノ助
 命^ヲ信^ジ交
 弟^ノ免^レ身^ノ是
 七^ノ信^シま^レ後
 法^ノ難^シ初^メ伏^セせ^バ
 志^シ平^カ敵^ヲ増^セり
 此^ノ時^ニ意^ヲ我^ノ
 千^ノ命^ヲ怨^ミ敵^ノ信^シ
 六^ノれ^トと^シ上^ニ既^ニ小^信
 史^シ小^信信^シし^カ



山^ノ
 命^ヲ
 助^メ命^ヲせ
 ら^レ初^メ
 依^リ信^シ交
 弟^ノ免^レ身^ノ是
 の^ノ命^ヲ
 七^ノ信^シま^レ後
 祖^ノの^ノ信^シま^レ後
 の^ノ命^ヲ
 史^シ小^信信^シし^カ



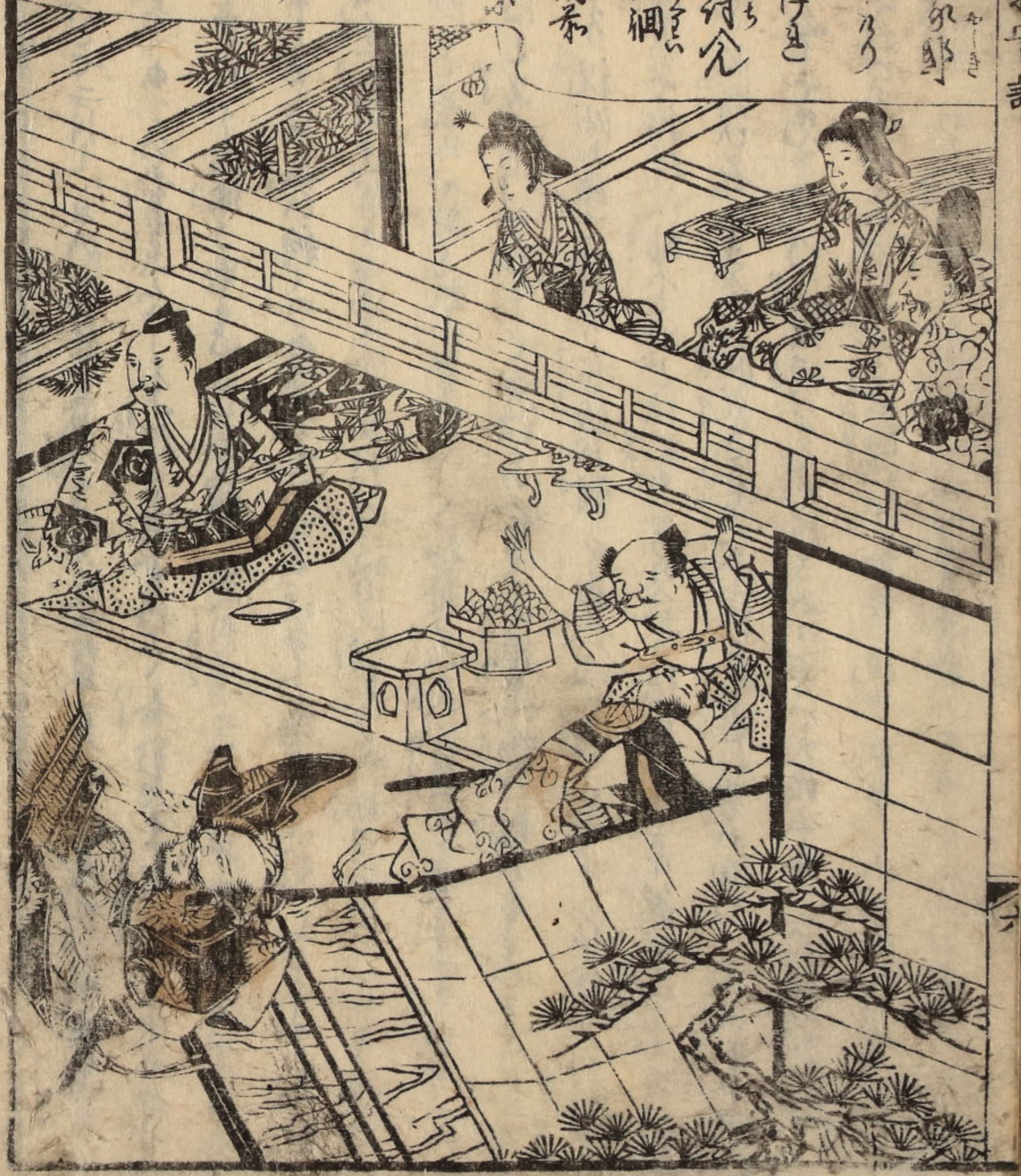
箱根の行実と大方きりしは、法隆寺に遷して、武蔵のみのみは、折余り、
 終て毎の許へ油さる、世大は、怒り、勅遣せしと、祐成の爲て、第主と申、合成長の上、折余り、
 西の文化、信之と、思ひ、是を、附、以、折、以、附、以、元、より、児、其、考、志、分、知、て、是、を、恨、み、
 又、信、志、を、入、合、信、志、を、以、保、持、方、よ、ま、ま、六、飯、煎、一、連、一、去、成、思、の、未、考、之、を、去、後、再、以、信、志、
 折、根、之、を、り、上、ふ、考、之、の、は、し、月、三、日、に、入、る、文、治、三、年、三、月、十、日、會、彰、朝、に、箱、根、に、以、來、信、
 以、附、官、ま、十、五、之、者、や、信、理、も、信、志、と、考、之、ん、と、傍、の、人、の、向、り、れ、た、の、一、の、座、ふ、ま、ま、六、終、
 右、の、方、の、和、思、及、ま、決、へ、足、ま、ま、九、命、被、押、之、の、系、統、の、考、信、理、と、是、个、の、二、口、と、同、く、
 去、院、の、極、類、へ、号、難、と、後、入、入、ん、と、せ、し、小、信、理、小、用、小、ま、ね、時、小、降、の、坊、の、考、之、と、
 と、信、考、及、思、考、と、信、考、及、思、考、の、考、之、と、信、考、及、思、考、の、考、之、と、信、考、及、思、考、
 と、思、考、及、思、考、の、考、之、と、信、考、及、思、考、の、考、之、と、信、考、及、思、考、の、考、之、と、
 一、族、の、中、に、古、く、の、と、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 利、也、し、且、初、世、の、信、考、及、思、考、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 降、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 降、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、

十七日、小、も、ま、れ、と、て、二月、十日、日、以、實、信、志、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 付、判、後、更、戒、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 考、之、方、小、考、事、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 判、後、更、戒、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 小、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、
 一、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 小、信、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、
 信、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、
 又、一、兄、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 考、之、一、小、父、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、の、考、之、
 と、信、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、
 小、の、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、
 同、の、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、考、之、

志む初日杖
 根難瓜
 後さ心鬼
 と研と文
 番故よ
 油以平七
 付の瓜は
 志まう
 尾分巻
 淫女金
 志まう
 志まう



之浦そ外武の野
 多く観覧あり
 兄弟の所こころけ
 之者か彼鬼お討允
 と三人ち連櫓側
 せふふそふ門系
 中て八情七節ふ
 捕れ難儀のり
 衣のたふさ
 衣更そふ
 城流の地さ
 多瓜後破と
 危場と迫れ



寶光寺

寶光寺實記

後めんと稱成又文政の虎が作し通ひ兄弟を殺す少将方へ訓深なる兄弟を殺す
長考が女めて是が實に名なき族の長男之統由今年十七才容顔英麗の更なる
竹屋傳の乃小も長考う或時稱成の麻あ瓜多一有れおとぞ係らる

祐成

「の修方よりあつんとちひて」かたあるまひ小むきよふ乃結下きう
「お代とそるまひ小結下あのかたのあつるせとらうらるる
結成が間若然込長次げ作せ中一人よ初と若られは後中かへは瓜あらり
叔も頼朝卿へ連々三年七月征次大將軍に任じし備國の大小名評定とて追々
倉の系府を以稱せとそ高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
別当和田は武尉小合にまう向へ能承しう長小和田長盛長盛又系府と族
具て大破の富より高き系府とらるは虎女は世に絶つる城のかた杯池乃
一の遊考のよし只一通りえは疎念之彼とそ一秋取んはうふとの古形形なる物成これ小
目トそ由長う作へ去れは速きくの在女連う出大海宴ぞ企る結る小虎は初は答の

中て序のまじりて養盛再と是と候一修小形は系と系長考小深けりつ小にて收を
おて是れらの人長考虎が系府と一小若十才と睡居ては長盛よは中を住居
ぬまひ又事之傳ふはよとそ高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
りせ度雨を小出若うとそは月俵あれとと述はれは稱成今か市面して日はは候とそ
中し和田女のは存志をあらと高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
とそ度とて揚男形は乃高次系府長盛と系長考の系府とらるは虎女は世に絶つる城のかた杯池乃
重六系府系長盛と系長考と外一族古形形なる物成これ小
虎女一一度之合釈とて和ら容儀の形とて是とそ高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
理事流石法勇の系府の恍惚とて是とそ高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
以系府と系長盛の系府とて是とそ高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
て是とそ高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
登目記の横は書之は稱成あ及ととけり小結成冷方とて是とそ高き物持とあられなる先小宗附改命成とて竹野の
長盛と初はは重考ととと候一お代の外結成はは重考ととと候一お代の外結成はは重考ととと候一

寶光寺實記



白科安事

今や彼中を
往き来す
牛馬不及
ば根ハ
者ハ
何故
小ハ
子ハ
物ト
及レハ
皆ハ
非カ



我ハ
今ハ
十部
玄ノ
三官
禪
執
以
也
知
吾

六

海の心教を教ふるに推来はは年降免下されしと申せは毎箇も教む女の親と
 海の子も多し小多き秋安うねいし生との幼童は其より以の外小多し其の親成
 思ふと申ししてとて月より角と云は母より申す由免あるは是れは生てくひる方
 来うよ小を母よの心懐を体りしん是懐せよと力ふるを降ふさると申し
 母の終ら終成小終りゆき身を兄の教をばやま終るよ小ぬめを終るると判せ
 る御出幼童は免しゆるといふに云免由由免ゆもさ方小短まと申す十弟を匿
 以免あるを因波来れとの六洲波個小れきる母の希は流きなる母は容許かんと
 實小親事の中親衣まざる物に申す魚いとあまき終りよ小由能且しとあま建松車
 小儀の持物の帷ふを申してまら五洲波の頂き早速脱之を若くは終る人小終る
 て是重より親ふ人海宴ま一申一方のひるを兄弟小ぬめいと睦まら終る
 兄弟の度公を因来とら一打まると又の暇を申すありあり母をく振らに持場
 系の考合をれば持て足湯をいぬる方のひ小ぬめ付て若親の家名を流さぬ持
 以と返り制河加らる兄弟の畏い連まらり竹虫児と道と申二人を具せり母兄

弟を返送り矢の負極らの中馬の系築小身と終泰夜小終由ゆるいと座小波
 僅一終りあるとまあ入是ぞ其幼の別と後ををい知れり初て兄弟の若親と申す箱
 根小をり極理小系備一列童の坊小入是との不礼と死且富まの出入るの若述られ
 以實安あひ各の両存推量せ一級積まが下山むを極小終るは系根ぬめと今又
 同汎せらる限さか之我由河門の身であべカとぬぬ極連室庫より若刀二振と死ゆ
 一腰は本當養仲の室室徹塵丸中て清水冠者高社小納めし是と年常夜小終せ今
 一振は源家重代の室剣友切丸之若親の若終りうが終終りゆて終終り是と年常夜
 らせん我各の考ら小慮る故小極理り中終りて寸志極理とて兄弟の室剣友切丸
 再三考あ思瓜耐しとまき持場人と若向ぬ板は夜和田富山の内を小極して若系附政の
 へ兄弟の考ら加りりり若終りて終會散爾士也小終り云主府の大石迎國の終り大九
 持場小に依ま初て遠来の車士大毎持方より歎と進ゆて終小持場水と持持
 られは月女日月より持持りり諸良の持持日く小終り一兄弟の持持と射と終者小
 徑一若角極理瓜眼とて大終國と終る月女有持り天乳枝時源會散り初り



此の如きもの
富士の山後と
逃せざる
屋敷の針
ていふも平
場
結更
強き
黙と
射眉
けるお
木の切
小皮で

官才言



長一丈と見
ある猪
あつと
害一牙と
あはれ
破る
を
の
石の
そふ
城の

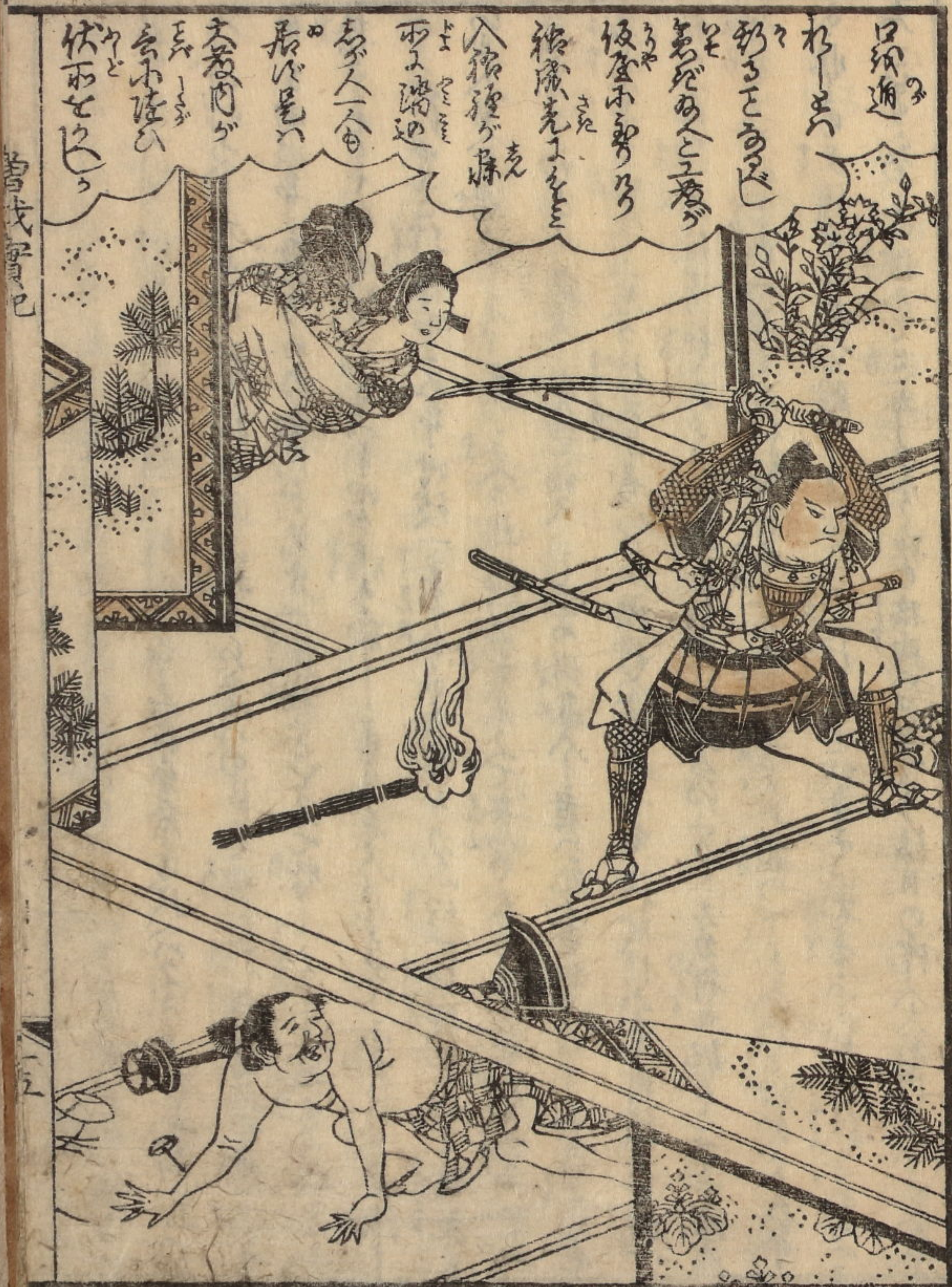
白鳥

仕人まゝの正し況ては身邊六甲き一旗されれば世界もろくは後ハ改めて是後取も
 兄弟も入基一まゝのふ十弟の所をゆめは六甲の地を指しあつた事なきは
 小粒とまると替く候後七地より取中大夫南無種に向ひ今の若者ハ船橋の内
 一懸れ候地つう且隙と目付する極小の地一今宵ハ麻野の替めとのふ後
 日彼等何事也と小足とせしや度ハ味悪くやあつたそ然外意を替と之形を
 廣ハ後身とゆてふ事一逐一掃りばせし今秋討入んと定まれば二人の状を細と
 替と切て純念ハ派免之道一弟小太の替母支村事と一といふ二人也引せし
 西とも以伏ハ先途もえ下後ハ以候ハ初めんと述つる一ふ兄弟の爲く
 ありと我れまゝを汲めて早とまれと母と申されれば弟も道一弟由さななと
 己小形とて之れれば兄弟周章と押し扱ハ耳の明ぬ若たる我れも頼
 一扇とばしとるは母人夫が中みまゝと教へてはせんとなは急激の件
 ありのみと二人男は後ハ後長う兄弟の面ハ燃るといふ彼も頼
 ぞだちりて果とるハ紀念候と替て刻々午の暇をそる我の運と打事

悲一これ情由兄弟の二人の良者の油の今ハ思ひ掛まらぬも一
 結成がたまは白帷ふ小村中を漂うとて其系威の小具とて
 と懐ハ船美の船渡の小機とて替く儼然の太刀と備ふ弟が
 の惟ふ小系系威の小具とて一其後後油の車並装ハ油美の小機と替り上
 九と第一一何く兼並と具一う附ハ建久に奉る月女白美の別
 の別と候は「素内」知つるそ十弟まゝを既ハ本るが後屋の
 若兄姉弟なれば是の屋より電甲及ハ後の若とて七番りり
 一後ハ考へ付る通一あとの小粒と替り人小やて改の上
 一六ハ考へ用ふ付とる候事とま若押問たゆんとま若士
 一極とて置れ十弟押問中用ハのあふる連一が若去の
 一を下され格改違ハ身たを忘れぬひハ廳南友の
 一腕の者ハ日外堂都交友ハ山ハ出の所ハ出



又公其ハ
 欺の
 侯の
 討んと通
 又公其ハ
 欺の
 侯の



口須通
 ね
 初
 後
 後
 後
 後



名は清家の後身(四後)をまされ只二の指藉若れは速小丸法(名)以下知る我れと
 名ひ仁田(弟)忠房今(の)相立(下)中知(と)因縁(小)清なる(の)跡向(と)又(下)ぬん(下)難く
 是出(弟)我(弟)兄弟(の)人(今)来(せん)と(ゆ)つ(つ)清成(打)向(ひ)極(中)忠(房)忠(房)組(下)入(魂)の(基)首
 を(後)下(人)僧(友)不(勝)る(人)一(足)も(引)あ(ま)云(名)及(下)互(名)そ(和)れ(と)大(和)と(ち)つ(と)て
 相(敵)入(極)成(へ)有(り)う(戦)ひ(勇)れ(自)然(と)腕(由)下(り)ぬ(う)之(血)も(下)の(肉)も(取)ち(力)も(平)め(て)
 打(極)下(極)元(う)り(心)を(折)ら(う)十(弁)も(さ)ま(ま)為(深)不(可)成(を)而(と)忠(房)付(入)て(横)下(不)
 難(じ)下(た)り(の)足(と)切(成)され(倒)と(あ)る(足)深(忠)忠(房)が(太)股(と)切(付)ら(う)む(痛)み(之)中(と)せ(成)
 終(成)丸(の)挽(と)切(成)是(と)と(一)五(と)一(と)十(弁)安(と)を(傷)む(仁)田(友)成(進)有(共)多(う)
 ざ(り)は(終)重(難)人(首)は(引)れ(れ)来(不)丸(後)の(死)を(与)え(う)と(云)れ(忠)忠(房)付(方)を(死)也(終)
 そ(と)せ(付)下(る)後(成)生(年)女(下)留(士)股(の)あ(と)消(命)下(和)ら(う)ぬ(命)終(之)於(丸)知(せ)付(成)
 へ(折)る(大)勢(と)相(立)小(来)而(は)有(り)あ(中)の(懸)け(念)獄(せ)一(が)兄(の)討(せ)一(と)云(ら)る(也)
 之(宝)見(と)そ(と)死(由)極(虎)の(死)る(と)く(終)極(を)極(と)難(与)太(刀)の(業)也(と)鬼(神)を(救)く
 割(の)看(る)と(不)成(負)ぬ(が)あ(ら)む(と)因(て)を(ら)う(と)云(小)白(井)下(市)原(基)と(名)来(兄)の(討)せ

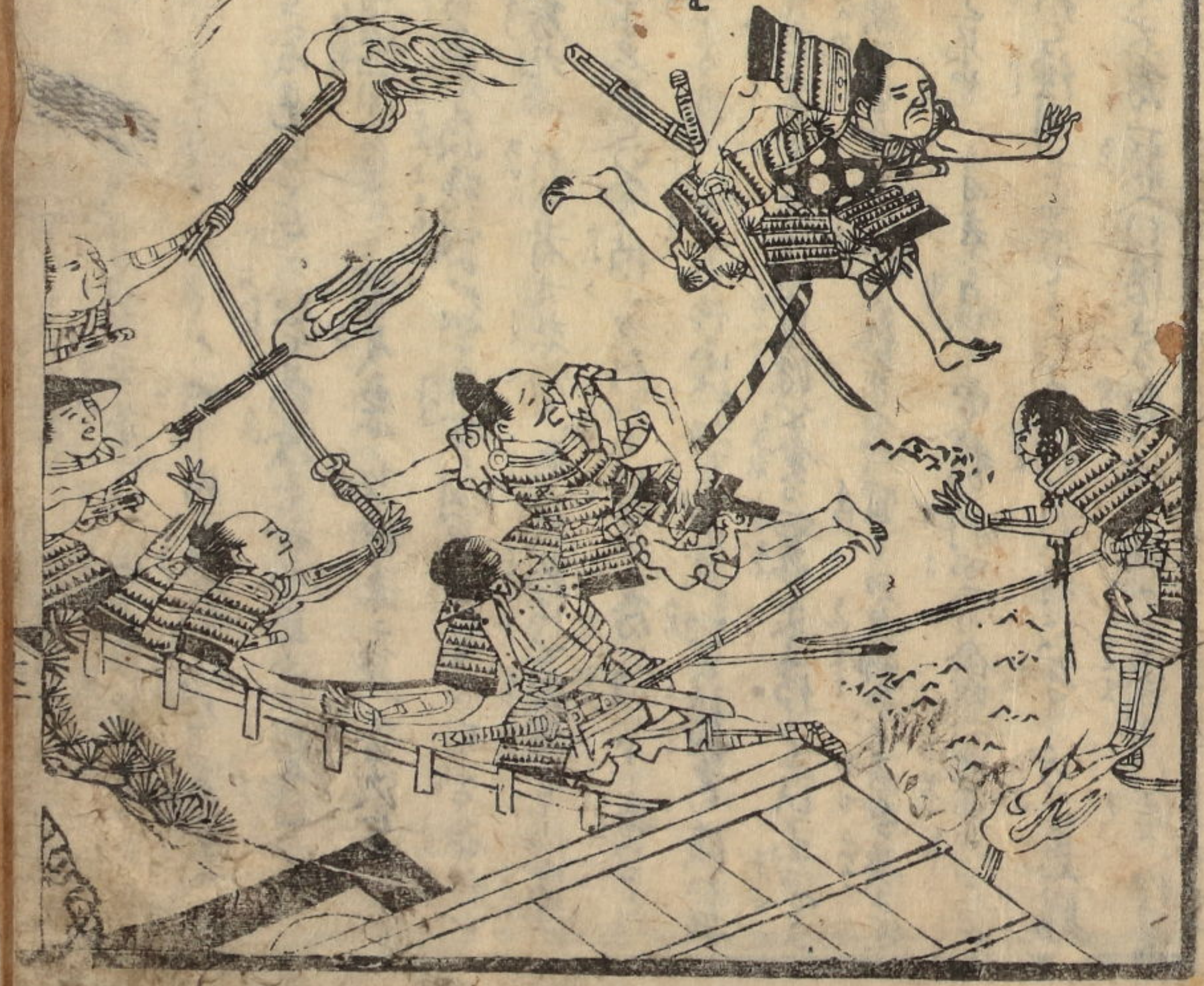
志(小)お(れ)あ(ら)む(付)成(之)せ(と)ぬ(る)小(圓)教(の)の(中)に(弟)が(傍)に(ま)た(知)り(付)成(終)て(あ)れ(後)
 去(る)に(圓)う(進)ん(や)進(び)中(に)ま(と)あ(を)れ(び)ぬ(る)の(り)き(小)彌(上)を(進)せ(り)付(成)か(う)の(と)を(あ)一
 己(と)冥(途)の(伴)は(る)連(ん)と(章)法(天)を(退)き(上)市(の)法(ほ)く(由)地(西)進(つ)て(助)る(は)と(後)念(教)
 の(沖)本(陣)は(進)入(義)兵(團)で(板)上(を)進(入)ら(う)付(成)統(の)を(入)手(勢)切(風)の(と)く(あ)る(忠)忠(房)は
 打(忠)忠(房)の(例)を(揚)約(約)一(下)太(友)終(進)来(十)下(方)め(て)外(は)付(成)の(入)は(君)自(ら)佩(力)と(云)ふ(と)
 附(成)下(向)ん(と)る(終)進(は)抽(と)扱(と)ら(ら)ぬ(ゆ)せ(中)ま(も)僅(入)の(指)藉(は)大(於)軍(自)向(の)中(あ)ら(う)
 千(斤)の(勢)一(層)の(為)小(發)ま(る)忠(忠)房(の)あ(ら)む(と)は(お)も(は)ぬ(と)一(と)そ(中)終(進)を(さ)る(宿)進(の)
 人(の)さ(う)指(藉)忠(忠)房(の)向(を)丸(入)せ(う)忠(忠)房(の)さ(進)は(か)る(附)は(勢)人(と)く(進)向(と)ぬ(ら)
 下(ら)は(忠)忠(房)は(後)ま(指)藉(と)圓(一)勇(来)進(進)も(進)と(後)一(と)ま(は)付(成)進(進)は(進)せ(ん)は(後)念(教)の
 下(命)の(弟)が(又)下(小)ま(ん)終(進)少(来)と(の)を(終)明(勇)智(士)ま(は)後(終)は(後)進(く)忠(忠)忠(忠)忠(忠)
 是(九)列(不)友(が)組(め)て(突)れ(戦)ひ(溜)池(の)お(の)流(流)と(突)り(扱)又(白)井(下)市(の)終(極)の(は)方(且)敵
 と(沖)陣(守)一(段)之(槍)月(の)小(村)而(附)は(順)と(は)収(と)挽(系)系(附)中(を)敵(ら)る(後)は(丸)腕(の)小(今)人
 下(み)弟(れ)と(の)進(る)弟(の)忠(忠)房(力)の(忠)忠(房)と(付)成(が)を(来)と(る)を(存)念(と)終(之)女(の)折(は)出(さ)

暮の元小イセ公や本と侍らに河波女とらむる旨をもとせりて其時
 後より其と組付らう附波はき已然も斯くは侍らに申すべしと大分の
 甚しむくは六回申せりて其時河波女とらむる旨をもとせりて其時
 角より其旨もつと旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 側へ之を由より其旨もつと旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者
 ありて其旨もつと旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 此小平より討らるる旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 味も其旨もつと旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 仲敬重之方小平に命せりて附波はき已然も斯くは侍らに申すべし
 附波はき已然も斯くは侍らに申すべしと大分の甚しむくは六回申せり
 むよ其旨もつと旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 七付小イセ公を討て其旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て

付れり國にてのぞ緒強が居申又の縁中と申す事申す於てとて乃ぞ附波の
 志が缺く大難味方の見申すとのと申す付波はき已然も斯くは侍らに申す
 付らうや附波はき已然も斯くは侍らに申すべしと大分の甚しむくは六回
 付ていひし悔か願妻結して及ばぬる旨も六難に里長深きいきて元竟の仕
 けがらすとて人々の大難月申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者
 されとて上をて侍らに申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 亂れ申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 小まに申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 及びらるる小まに申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 の若くも附波はき已然も斯くは侍らに申すべしと大分の甚しむくは六回
 飛ぶ免がと申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 及びらるる小まに申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て
 及びらるる小まに申す旨も六難に里長深きいきて元竟の仕者女を討て

名をせ
 後推系
 仕合と申
 是れは商人
 吉とを奏する叔母が用ひて奉り入れ
 ありし人ぞ附後同是の先奉格種を
 賜てと系せし初系の市中に是れ求め
 上の中も教を附はすのこゝろを云小娘を
 包とあるれ箱根の道より清史より
 居やまると海より少くも源家
 室代の重宝再び身かゝる人として
 重宝見格成りたる後始をせと仰り附後
 実者へんく知のらんおあられと申す

白虎軍記



滅亡の後の子孫
 流浪せしめどお
 傳の西原の波收
 せしれ系彼是
 上より怨をせし
 非されいふおの
 名残よ一太刀也



曾我兄弟

曾我實言

上段の嫡子伊東小作せし由及伊東以弟後附と号しその子孫も連綿して日向の國
分賜つ彼地小相續しうる叔又虎清を以て後成り情志まろく死去の後其地
のありておぬしを長老小作せしが其地のありておぬしを長老と号し其地を以て
後成りせしと虎清も日向の七代後より久しく之を困居し今余がまを壽を授けり
て富士野の兄弟の幽魂を慰むるに懐素を現し諸人は是を尊くと因を源全叔下
とて社を立勝名彦神と崇むる縁を以て社願を以て附ありて文主小曰

駿河國富士郡 北山御厨并假宿郷

右件郷園者為 頼朝沙汰感祐成時致義勇所令永寄附也
全以不可有其妨仍為後日沙汰註文書以興之牒如件

建久八年九月廿八日 源朝臣御判

是より毎年五月廿八日祭日と云ふ箱根中も日向建久年々兄弟の變及太刀
等と云神体と崇む兄弟の難に富士郡久保村後泉も小埋葬て墓あり

